

## 顕現後第 1 主日

イザヤ書 42 章 1-9 節

使徒言行録 10 章 34-38 節

ルカによる福音書 3 章 15-16、21-22 節

先週の木曜日に顕現日を迎え、降誕節が終了しました。本日は、顕現後第 1 主日です。主イエス・キリスト洗礼の日とも呼ばれる主日です。今年のクリスマスに、イエス様の誕生をお祝いし、それから 8 日目の 1 月 1 日の礼拝では、イエス様が、イエスと名付けられたことを学びました。そして、先週は、三人の博士の訪問のお話を中心に、「マタイによる福音書」が描くイエス様の誕生の全体から学びました。本日は、そのイエス様の成長期を飛び越えて、洗礼の時の事柄を学びます。

現在の聖餐式聖書日課では、イエス様のご生涯について、聖霊降臨後の主日で、福音書から深く学びます。しかし、この顕現節でも要点を取り上げて、学ぶようになっていきます。それは、元来、このイエス様の洗礼の出来事が、顕現日の内容と考えられていたからです。伝統的には、クリスマスからイースターまでの間に、イエス様の誕生、命名、洗礼、生涯、そして、受難と復活、それらを礼拝の中で学ぶように、教会歴と聖書日課が組み立てられていたと考えられます。

さて、本日は、「ルカによる福音書」に記述されている洗礼者ヨハネに宣教と、彼からイエス様が洗礼を受けられたお話から学びます。これらのお話は、4 つの福音書すべてに書かれています。それぞれ内容が異なります。「ルカによる福音書」と「マタイによる福音書」は、「マルコによる福音書」を基にして記したと思われるが、それぞれの記述は、もとの「マルコによる福音書」よりも、描写が細かくなっています。それぞれの福音書の主旨に基づいて、洗礼者ヨハネの洗礼と、イエス様の名による洗礼との違いを、より明確にしているということです。

まず本日の「ルカによる福音書」3 章 15 節に「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた」とあります。洗礼者ヨハネは、奇跡的な行為を行うことはありませんでした。しかし、その大胆な宣教活動から、イスラエルの人々から、メシアかもしれないと思われたことを、この節は告げています。ただし、これは物語世界の中での情報であって、「ルカによる福音書」の読者は、イエス様がキリストであることを知り、またその誕生時から、洗礼者ヨハネとイエス様との違いを教えられています。言い換えれば、物語世界の中の民衆が勘違いをしていることをすでに教えられています。ただし、どのように違う

のかは、具体的に示されていませんでしたので、ここで洗礼者ヨハネ自身が自ら説明するのです。ヨハネは、「皆に向かって言った」とあります。ここにある「皆」という表現は、漠然としています。先に出た「民衆」の他、読者も含めているといえると思います（洗礼者ヨハネとイエス様は、単なるい親戚だと思っていた、あるいは、違いがわからないと思っていたとい読者は、ここで情報が修正されることとなります）。

ヨハネの語る内容は、「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」（ルカ 3：16）です。ここでは、「マルコによる福音書」の「聖霊で洗礼を」（マルコ 1：8）と異なり、「火」という言葉が加わっています。また本日の聖書日課では省略されていますが、この言葉の後、ヨハネは「手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる」（ルカ 3：17 以下）と、脱穀場についての譬えをつづけます。それは、自分の洗礼とは異なり、イエス様の名による洗礼が、最終的な救いにも結び付く事柄であることを示しています。これらの洗礼者ヨハネの言葉から、洗礼者ヨハネによる洗礼と、わたしたちも受けているイエス様の名による洗礼との違いを考えたいと思います。

まず、洗礼者ヨハネの洗礼についてですが、それは端的に言って、律法と神殿祭儀によって義とされるという、従来の救いの制度に対して、ただ一度の悔い改めの洗礼によって義とされるという、新しい救いの制度と言えます。ユダヤ教において、主なる神様が与えた律法に基づいて歩めば、幸福になるはずですが、そして、律法から外れて過ちを犯したとしても、律法に基づいて償いをすれば、主なる神様と人に対して、義とされるのです。その償いは、人々の前で公に行われる事柄ですが、神殿祭儀、ことにエルサレムの神殿祭儀がそれを代表して行います。

しかし、その罪の赦しと償いの制度は、人間がその解釈と判断にかかわる制度であるがゆえに、腐敗してしまう可能性があります。事実、イエス様の時代、神殿祭儀は腐敗していたのです。それゆえに、神殿祭儀における金銭や物品の授受に関係なく、主なる神様への悔い改めの気持ち、立ち返る気持ちを持って、洗礼を受ければ清められる、義とされる、それが主なる神様の意図であると宣教したのが、洗礼者ヨハネでした。その宣教は、イスラエルの人々にとって、衝撃的であったと思います。

それでは、洗礼者ヨハネの洗礼で、十分ではないかとも思えます。確かに、ユダヤ教の中での改革としては、ヨハネの洗礼を新たな制度として加えることだけでも、十分と言えるかもしれません。しかし、主なる神様の本来の目的は、イスラエルの人々の救いだけではないのです。そのことは、本日の使

徒書である「使徒言行録」の中で、ペトロが、「神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです」（10：34-35）と述べている通りです。つまり、どんな国の人でも救われるため、すなわち、すべての人の救いという意味では、洗礼者ヨハネの洗礼は、制限があったといえるのです。

それでは、イエス様の名による洗礼は、何が異なるのでしょうか。それは、洗礼者ヨハネの洗礼が、律法に基づく、この世界での罪の赦し、この地上での救いに対応するものであるのに対して、イエス様の名による洗礼は、ユダヤ教の枠組みを超えて、またこの世界の事柄を超えて、主なる神様に対する根本的な罪の赦し、そして永遠の命という、救いに関わる事柄であるということです。そのことは（水ではなく）「**聖霊と火**で」という表現で示されています。「マルコによる福音書」には、「聖霊」だけでした。その表現だけでも、「水による洗礼」との違いを示しているのですが、「ルカによる福音書」は（「マタイによる福音書」と同じく）、「**火**」という言葉を加えて、イエス様の名による洗礼には、現在の罪の赦しだけでなく、終末時の救いの完成につながる意味があることを示しています。

ただし、この「火」をどのように解釈するかで、意味が大きく変わります。洗礼を受けても救いから漏れる人もいるかもしれない「裁き」と考えることも、洗礼を受けたすべての人が救いられるための「精錬」と考えることもできるからです。わたしは、『聖書』全体から考えれば、後者が主なる神様の意思だと思えます。それゆえに、終末の時を迎えたとき、イエス様の名前による洗礼が、永遠の命につながる意味があるのです。

さて、わたしたちは、このような意味を持つ、イエス様の名による洗礼を受けたのですが、「ルカによる福音書」を含めて、イエス様が洗礼を授けたとはどの福音書も記述していません。「ヨハネによる福音書」は、そのような記述がありますが（ヨハネ4：1）、すぐに次の節で否定されています（ヨハネ4：2）。そのことから言えば、イエス様は、洗礼者ヨハネと同じような仕方で、より新しい意味を持つ洗礼を実施されたわけではありません。しかし、イエス様のご生涯を振り返るとき、その方のお名前による洗礼は、すべての人の救いをもたらす意味がある、教会はそのことを受け継いだのです。

そもそも、すべての人に救いを、そのように望む方とは誰でしょうか、それは、わたしたちの信じる主なる神様です。本日の旧約日課のイザヤ書42章8節に、「わたしは主、これがわたしの名」とあるその方です。この「主」という言葉は、発音してはならない神様の名前です。そして、この「主」という名前の一部が、1月1日の主イエス命名日の礼拝で確認しました通り、「イエス」という名前に含まれているのです。

さらに、本日の使徒言行録の記述によれば、ペトロは、その主なる神様が、

イエス様をメシアとしたと述べています。「つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました」（使徒10：38）とある通りです。新共同訳では、そのように訳されていますが、新しい訳では、「つまり、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました」となっています。原文に近く訳しますと、「つまり、神が、聖霊と力で、彼に油を注いだ方としての、ナザレのイエス（です）」となります。この部分は、訳すことが少し難しいのですが、使徒言行録の著者は、主なる神様が、聖霊と力を通して、イエス様に油を注いだこと、つまり救い主・メシアとしたと語っていると思います。それは、イエス様は、救い主・メシアであるが、それは今までのユダヤ教の歴史の中に存在したような、人間が人間に油を注いで誕生したメシアとは、まったく異なることを示しているのです。

わたしたちは、クリスマスで、イエス様の誕生をお祝いしました。それはイエス様を通した救いが、世界に誕生したことを喜ぶことにほかなりません。そのことがはっきりとわかるように、その幼子が「イエス」、つまり「ヨシュア」（主が救い）という意味の名前となったことを、元旦に確認しました。また顕現日には、その名前を持つ方の誕生が、人々に広く伝わったことを確認しました。今日、わたしたちは、改めて、その「イエス」というお名前を通して、洗礼を受けることの意味を学びました。それは、「主が救いである」というお名前が、時空を超えて永遠の命に結びつくことです。

わたしたちが、救い主・メシアであるイエス様の名による洗礼を受け、ここに集められているということは、この世界の救いのみならず、永遠の命につながる救いに、結び付けられたことを意味しています。それ故、どんなことがあっても安心であるという思いがあります。そして、そこに本当の希望があることを、未来の世代にも伝えて続けていく使命があることを意味しています。

2020年に始まったコロナ禍は、2022年の新年を迎えてもまだ終息しませんでした。それでも、昨年は、昨年独自の仕方でもクリスマスをお祝いしました。そして、わたしたちだけではなく、近隣の方々にも、そのクリスマスのお祝いを楽しみにしてくださった方がおられることを、改めて確認いたしました。コロナ禍についてのたくさんの情報と共に、たくさんの不安があり、未来の予測ができるようで、まったく予測がつかないような状況です。このような中であるからこそ、「主が救いであること」を、あらためて心に刻みたいと思います。新しい年の教会の歩みも、コロナ対策を怠ることはできませんが、不安がたくさんある中で、わたしたちが主なる神様に愛され守られていることを、教会を通して社会に示していきたいと思います。